

「心のしわを伸ばされて」

コリントの信徒への手紙二 1章 4～6節

心理福祉学部兼人間福祉学部チャプレン 五十嵐 成見

「心に響く聖書の言葉」というテーマで奨励をすることになった際、私の心にすぐ思い浮かんだ言葉が、本日の聖書箇所です。

大学1年生の時の12月ごろ、私が所属していたオーケストラ部の同級生が急逝しました。つい先日まで、音楽室で一緒に練習をしていた仲だったのです。

私にとって、自分の身近な存在が急にこの世界からいなくなることは、初めての経験でした。それまで近くにいた人が、急に会うこともできなくなる。また、その人の人生が急に閉ざされてしまい、やりたいこと、したいことがいっぱいあるのに、まだ自分と同じ年の友の人生が何の前触れもなくいきなり絶たれてしまう。やり場のない感情の矛先を向ける場を知らず、友人から見ると狼狽しているように見受けられたようです。（そういえば、高校の時の友人のお父様が亡くなられた際にも、同様の感情を抱き、その際には、私が激しく動揺しているのに、平然としているように見える親の姿に、大変未熟な怒りの感情を持ったことをふと思い起こします。）

なかなか動揺が収まらず、同時活動していたクリスチャン・サークルの先輩だった方に話したことがあります。ただ、あまり落ち着いた話し方にはなりません。怒りをぶちまけたようなちょっと乱暴な言い方だったのではないかと記憶しています。

その後、彼女から一通の手紙をもらいました。「手紙」、といっても、B5サイズの大学ノートの中の一冊を破ったものですが、その手紙に、彼女は次のように書いたのです。

「『神はどのような苦しみの時にも私たちを慰めてくださいます。こうして私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも、慰めることができます。』Ⅱコリント1:4～今は、神様みえないかもしれないけれども、神様は私たちが、いてほしくないと思ってもいてくださるし、恵みを与えています。」

正直に言って、この聖書の言葉の意味が、その時、それほど明瞭となったわけではありません。けれども聖書の告げる「慰め」という言葉が、彼女の手を通して、私の心にそっと置かれたような気がして、その手紙のおかげで、私の心にある落ち着きが訪れたのです。

「慰め」という言葉は、現代の私達の感覚にとって、あまり肯定的な意味合いとして受け取ることが少ないように思えます。慰み者、従軍慰安婦など、どちらかといえば性的なマイナスのイメージを伴っており、一時的な男性の感情を解消する手段としての対象を指す場合に用いられるように思います。

しかしながら、「慰」という言葉は、本来、大変豊かな意味を持っています。それは、「熨」という、今でいうアイロンを指しています。電気のなかった時代、柄がついた鉄製の容器に、燃した石炭を入れ、その熱で服の皺を伸ばしたのです。その「熨」、が、慰める、という言葉につながっています。だから、慰める、ということは、しわを伸ばすこと、もっと言えば、心の皺を伸ばすことだと言えます。

私達は、多くの葛藤や苦しみ、悲しみ、痛み、弱さや欠けによって、心に深い傷を持ちます。その傷が濃み、やがてしわになっていくのです。あたかも、新しい白い紙が握りつぶされる時に、ぐしゃぐしゃと皺を寄せながら小さくなっていくように、深い皺の寄った心は、小さくなり、固くなり、そして頑なになるのです。

けれども、その深く広く寄ってしまった心の皺に、少しずつ指をあてて、温めてゆっくり伸ばしていく。それが「慰める」という意味です。そして、聖書が語る「慰め」とは、この意味とまさに合致します。その慰めを備える存在が、神だということです。

私達の人生には、大きな困難が時に付きまといまいます。そのことによって、心が頑なになり、意固地になります。けれども、神は、イエス・キリストを通して、私達の心を伸ばされようとされる。私達の心を柔らかく、大きく広げようとされる。そして、神は、どんな人に対しても、慰めを与えることが可能だということです。

そして、神の慰めを受けた人は、今度は、誰かの心のしわを伸ばすお手伝いをする存在として変えられていく。そのことを、この言葉は、約束しています。そのようにして、私たちが、慰めあっていく存在となります。

私の先輩が、手紙を通して、私のことを慰めてくださったように。このような慰めのキャラクターを発揮することが、私達にとって、神さまからつくられた人間の人間らしさに生きることなのではないでしょうか。そして、あなたも、誰かの慰めの存在となることを神さまは求めているのではないのでしょうか。

2019年10月10日 聖学院大学 全学礼拝シリーズ礼拝「心に響く聖書の言葉」